

# うま獣医のよもやま話 ②〇 渡辺晶子 獣医師

## 骨端炎

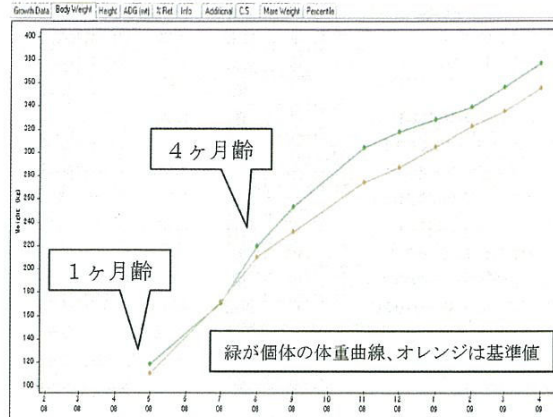
門別診療所 渡辺晶子

骨端炎はOCD（離断性骨軟骨症）等も含まれるDOD（発育期整形外科的疾患）の一つであり、長骨の骨端軟骨に発症する、軟骨から骨組織に置換する際の骨化異常です。生後2～4ヶ月齢の子馬では管骨遠位端（球節部）でよく見られます。症状として、腫脹・帯熱・疼痛・跛行が見られます。また、生後8ヶ月以降ではトウ骨遠位端（腕節部）で同様の症状が見られます。レントゲン検査で確定診断し、程度を知ることが出来ます。球節での骨端炎の疼痛はクラブフットを誘発することとも言われています。関節や肢勢に異常を来さなければ予後は良い疾患です。しかし、重度な症例で異常肢勢や、関節の変形を伴った場合は競走馬としての予後を左右する例もあり、よくある疾患とはいえ軽視はできません。

写真は生後4ヶ月齢の当歳馬の球節です。球節部が四角くなり、軽度の骨端炎を発症しています。治療としては患部の冷湿布や運動制限を行い、正しい飼養管理が行われているかを確認します。程度により消炎鎮痛剤の投与、飼養管理の見直しも必要です。調査報告では球節での骨端炎は2～3ヶ月齢の体重増加が大きい子馬に発症が多いという傾向が見られます。

骨端炎が起こる原因としては、エネルギーの過剰摂取や急激な発育、過剰な運動による外傷性の成長板損傷が関与していると考えられています。

毎日馬を見ていると変化に気づかないこともあるため、定期的な体重測定やボディコンディションスコアを記録することで図のような成長曲線を確認でき客観的に見ることが出来ます。骨端炎が発症するようなときは増体重が大きな場合が多いです。緩やかな成長曲線の中で変化があった際は、季節性も考慮しなくてはいいませんが注意が必要なのです。



下の写真は、泌乳のためのエネルギーと栄養素を必要としている母馬の採食時のものです。母馬の飼葉桶に子馬が届かない位置に設置されています。地面に生えている草を食べる馬の食事には随分高く食べ辛そうではありません。しかし、母馬に必要な栄養を十分に取らせるため、子馬に不必要なエネルギーを与えないために必要な措置です。



飼料を確実に採食出来る様にするために準備が必要ですが、親の飼葉とは別物です。

ボディコンディションが上がってくる青草豊富な季節がやってきました。母子共に飼養管理には十分にお気をつけ下さい。